

## 概略

- RS ウイルスによる感染症です。
- 2歳までにほとんどの子どもが1度はかかると言われるほど、とてもありふれたウイルスです。

## 症状

- 主な症状は咳、鼻水、発熱です。
- 年齢によって症状の強さが大きく異なります。年齢が小さいほど症状は強くなる傾向があります。
  - ◇ 生後6か月未満児は細気管支炎（重症な気管支炎）を起こしやすく、入院治療が必要になることもしばしばあります。（ただし乳児が感染しても8～9割は軽症です。過度に恐れすぎないようにしましょう。）
  - ◇ 生後6か月～2歳未満でも気管支炎、細気管支炎を引き起こすことがあります。
  - ◇ 2歳児も時に気管支炎、細気管支炎を起こすことがありますが、重症化する割合はより小さくなります。
  - ◇ 3、4歳はその他の感冒に比べ、発熱が長引いたり、咳が強い傾向はありますが、入院が必要となることはほとんどありません。
  - ◇ 5、6歳にとっては他の風邪とほぼ変わりはありません。
  - ◇ 学童以上の子どもや健康な成人にとってはRSウイルスは軽い鼻水や咳といったより軽い風邪ですみます。

## 治療

- 抗ウイルス薬はないため、対症療法（発熱や咳、鼻水などの症状を和らげる治療）が中心です。
- 低出生体重児や心疾患児など抗体の注射（シナジス）による予防の対象となる場合があります。

## 検査

- 保険診療では検査の対象（保険適応）は「発熱や咳、鼻水などがある1歳未満児」です。
- 1歳以上は保険適応ではありませんが、発熱が続いていたり、呼吸が早いなどの呼吸障害の症状がある場合は医師の判断で検査をおこなう事があります。

## 出席、登園の可否

- RSウイルスは一般的な風邪などと同じ扱いです。（新型コロナウイルス感染症やインフルエンザのような出席停止期間は設けられません）
  - ◇ 十分に解熱して、咳、鼻水が落ち着いてから登園を再開してください。
    - 十分な解熱とは：体温は1日のうちでもあがったり下がったりします。少なくとも登園する前日の午後から発熱がないことは確認してください。
    - 咳、鼻水が落ち着く状況とは：特に咳は夜に程度が強くなることが多いです。夜間は多少咳、鼻水があっても寝られる程度に落ち着く程度が登園再開の目安と考えられます。日中であれば多少咳をすることがあるが、走って遊んで、咳で遊びが中断しなくて済む程度が目安でしょう。